

道祖問答

芥川龍之介

青空文庫

天王寺てんのうじの別当べつとう、道命阿闍梨どうみやうあざりは、ひとりそつと床をぬけ出すと、経机きようづくえの前へにじりよつて、その上に乗っている法華ほけきよ経う八の巻まきを灯あかりの下に繰りひろげた。

切り燈台の火は、花のような丁字ちやうじをむすびながら、明あかるく螺鈿らでんの経机を照らしている。耳にはいるのは几帳きちやうの向うに横になつてゐる和泉式部いずみしきぶの寢息であらう。春の夜の曹司ぞうしはただしんかんと更け渡つて、そのほかには鼠ねずみの啼く声さえも聞えない。

阿闍梨あざりは、白地の錦の縁ふちをとつた円座わらふだの上に座をしめながら、式部の眼のさめるのを憚はばかるように、中音ちゆうおんで静かに法華経ほけきよを誦ずしはじめた。

これが、この男の日頃からの習慣である。身は、傳の大納言
藤原道綱の子と生れて、天台座主慈恵大僧正の弟子となつた
が、三業も修せず、五戒も持した事はない。いや寧ろ「天が下
のいろごのみ」と云う、Dandyの階級に属するような、生活さえ
もつづけている。が、不思議にも、そう云う生活のあい間には、
必ずひとり法華経を讀誦する。しかも阿闍梨自身は、少しもそ
れを矛盾だと思つていないらしい。

現に今日、和泉式部を訪れたのも、驗者として来たのでは、勿
論ない。ただこの好女の数の多い情人の一人として春宵の
つれづれを慰めるために忍んで来た。——それが、まだ一番鶏
も鳴かないのに、こつそり床をぬけ出して、酒臭い唇に、一切

衆生皆成仏道の妙經を讀誦しようとするのである。……

阿闍梨は編袵へんさんの襟を正して、專念に經を讀んだ。

それが、どのくらいつづいたかわからない。が、暫くすると、切り燈台の火が、いつの間にか、少しずつ暗くなり出したのに気がついた。焰ほのおの先が青くなって、光がだんだん薄れて来る。と思うと、丁ちようじ字のまわりが煤すすのたまつたように黒み出して、追々に火の形が糸ほどに細つてしまう。阿闍梨は、氣にして二三度燈心をかき立てた。けれども、暗くなる事は、依然として変りがない。そればかりか、ふと氣がつくと、灯あかりの暗くなるのに従つて、切り燈台の向うの空氣が一ひとつ所だけ濃くなつて、それが次第に、影のような人の形になって来る。阿闍梨は、思わず誦經どきようの声を

断つた。――

「誰じゃ。」

すると、声に応じて、その影からぼやけた返事が伝つて来た。

「おゆるされ。これは、五条西の洞院とういんのほとりに住む翁おきなでござる。」

阿闍梨あざりは、身を稍やや後あとへすべらせながら眸ひとみを凝こらして、じつと

その翁を見た。翁は経きよ机ようづくえの向うに白すいの水かん干かんの袖を搔かき合せ
て、仔細しさいらしく坐まつてゐる。朦朧もうろうとはしながらも、烏帽子えぼしの紐

を長くむすび下げた物ごしは満更まんざら狐狸こりの变化へんげとも思われぬ。

殊けだかに黄色い紙を張つた扇を持つてゐるのが、灯あかりの暗いにも関らず
気高くはつきりと眺められた。

「翁とは何の翁じゃ。」

「おう、翁とばかりでは御合点ごがてんまいるまい。ありようは、五条の道祖神さえのかみでござる。」

「その道祖神が、何としてこれへ見えた。」

「御経うけたまを承わり申した嬉しさに、せめて一語ひとことなりとも御礼申そうとて、罷り出たのでござる。」

阿闍梨は不審らしく眉をよせた。

「道どうみよう命めいが法華経を読み奉るのは、常の事じゃ。今宵に限った事ではない。」

「されば。」

道祖神さえのかみは、ちよいと語を切つて、種々しやうしやうたる黄髪こうはつの頭を、

ものう

懶げに傾けながら不相変あいかわらず、咳くような、かすかな声で、

「清くて読み奉らるる時には、上かみは梵ぼん天てん帝たい釈しやくより下しもは恒こう河がし

沙やの諸しよ仏ぶつ菩薩ぼさつまで、悉ことごとく聴ちよう聞もんせらるるものでござる。よつ

て翁げせんは下賤げせんの悲しさに、御身おんみ近ちかうまいる事もかない申さぬ。今宵

は——」と云いかげながら、急に皮肉な調子になつて、「今宵は、

御行水ごぎようずいも遊ばされず、且につ女人にょにんの肌はだに触ふれられての御誦經ごずきよう

でござれば、諸もろ々の仏神も不浄いを忌いんで、このあたりへは現げんぜ

られぬげに見え申した。されば、翁も心安げんざんう見けん参さんに入り、聴聞

の御礼申そう便宜を、得たのでござる。」

「何とな。」

道命阿闍梨どうみょうあざり

は、不機嫌らしく声をとがらせた。

道祖神さえのかみは、

それにも氣のつかない容子ようすで、

「されば、恵心えしんの御房ごぼうも、念仏読経し四威儀いぎを破る事なかれと仰せられた。翁かほうの果報かほうは、やがて御房だごくの墮獄だごくの悪趣ごごと思召され、向後こうごは……」

「黙れ。」

阿闍梨てくびは、手頸てくびにかけて水晶の念珠をまさぐりながら、鋭く翁の顔をいちべん一晒いちべんした。

「不肖ながら道命は、あらゆる経文論釈まなこに眼を曝まなこした。凡ほんびやく百ほんびやくの戒行徳かいぎようとく目も修せなんだものはない。その方ほうづれの申す事に気がつかぬうつけと思うか。」——が、道祖神さえのかみは答えない。切り燈台とうだいのかげうづくまに蹲うづくまつたまま、じつと頭を垂れて、阿闍梨あせりの語ことばを、

聞きすましているようである。

「よう聞けよ。生死即涅槃しやうじそくねはんと云い、煩惱即菩提ぼんのうそくぼだいと云うは、悉

く己おのが身のぶつしやう仏性をこころ観ずると云う意じゃ。己が肉身は、三身即

一の本ほん覚如がくによらい来、煩惱業苦ごうくの三道は、法身般若外脱ほつしんはんにやげだつの三徳、

娑婆しやば世界は常寂光土じやうじやつこうどにひとしい。道命は無戒の比丘びくじゃが、

既に三觀三諦さんかんさんたいそくいつしん即一心だいちごみの醍醐味みとくを味得した。よつて、和泉式いずみし

部きぶも、道命まなこが眼まなこには麻耶夫人まやふじんじゃ。男女なんによの交会も万善ばんぜんの功徳くどく

じゃ。われらが寢所くおんほんじには、久遠本地くおんほんじの諸法、無作法身むさほつしんの諸仏等、

悉く影顯えいげんし給うぞよ。されば、道命が住所りやうじゆほうどは靈鷲宝土りやうじゆほうどじゃ。

その方づれ如き、小乘しょうじやうしゆうふん臭糞みだりの持戒者みだりが、妄みだりに足を容いるべ

きの仏国でない。」

こう云つて阿闍梨は容かたちをあらためると、水晶の念珠を振つて、
苦にが々にがしげに叱りつけた。

「業ごう畜ちく、急いそ々に退のき居ろう。」

すると、翁おきなは、黄いろい紙の扇を開いて、顔をさしかくすよう
に思われたが、見る見る、影が薄くなつて、螢ほたるほどになつた切り
燈台の火と共に、消えるともなく、ふつと消える——と、遠くで
かすかながら、勇ましい一いち番ばん鷄どりの声がした。

「春はあけぼの、ようよう白くなりゆく」時が来たのである。

(大正五年十二月十三日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1995（平成7）年10月5日第13刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiya

校正：earthian

1998年11月11日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

道祖問答

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>